平和行事参加の旅の感想文

保護者

私の息子は幼い頃から広島に強い関心を抱いていました。なぜ原爆が落とされたのか、なぜたくさんの人々が命を落とさなければならなかったのか、その理由を真剣に考え続け、「広島に行ってみたい」と何度も口にしていました。私たちはしばらくアメリカで生活していましたが、その時から息子は「日本に帰ったら必ず原爆ドームに行きたい」と強く願っていました。今回、母と息子の二人で広島を訪れることができ、その思いを現実にできたことは、親子にとって非常に大きな出来事となりました。

実際に原爆ドームの前に立ち、本川小学校を訪れたとき、当時そこに通っていた子どもたちの姿が心に浮かびました。一瞬にして日常を奪われ、夢や希望を抱いたまま命を落とした子どもたち。その事実を思うと、胸が締め付けられました。静かに残された建物は、悲惨な出来事を無言で語りかけてくるようでした。息子も真剣な表情で説明を聞き、「どうしてこんなことが起きてしまったのだろう」と繰り返し問いかけていました。その姿を見て、親として、戦争や核兵器の恐ろしさをきちんと伝える責任を強く感じました。

平和は決して当然のものではなく、過去の犠牲の上に成り立っています。母親である私自身も改めてその尊さを胸に刻みました。今回の訪問を通して息子と一緒に学んだことを、これからの日常の中でも忘れず、平和を守るためにどう生きていくべきかを考え続けたいと思います。そして、未来を担う子どもたちが同じ悲しみを経験しないように、歴史を語り継ぎ、平和の大切さを次の世代へ伝えていく決意を新たにしました。

平和行事参加の旅の感想文

小学５年生

ぼくが広島へ行きたかった理由は、人類で初めて原子爆弾が落とされてしまった場所だからです。ずっと行きたいと思っていて、やっと行くことができました。広島で原爆のことをたくさん知って、もう二度とこのようなことが起こってはいけないと思いました。

原爆ドームを見たとき、「ここで本当に原爆が落とされたんだ」と思いました。原爆は大きな被害と悲しみを生み出します。原爆を落とされた国は日本だけです。他の国は原爆のこわさをちゃんとわかっていないように感じました。だから日本が訴えつづけることが大事だと思います。きっといつか世界はわかってくれると信じています。

本川小学校にも行きました。本川小学校は爆心地から一番近かった学校で、当時は鉄筋コンクリートでできた自慢の学校だったそうです。でも、その学校でも原爆を防ぐことはできませんでした。児童の写真は合わせて４１０人いましたが、生き残ったのはたった１人だったと知り、とても悲しく思いました。

戦争は人が起こしてしまうものです。そして人がつくった原爆がたくさんの命をうばいました。だからこそ、このことを忘れず、これからもずっと伝えていかなければならないと強く思いました。

本川小学校へ訪問して

保護者

今回、私自身、人生で２回目の広島訪問になりました。１回目は、１０年ぐらい前に仕事で広島市内へ日帰り出張することになり、昼過ぎには仕事が終わったので、一人で自由もきくし、せっかく来たのだからということで、原爆ドームと平和記念資料館を見学してみようと思い、訪問することにしました。

初めに原爆ドームを見たときに、被爆したときのまま残っていることに驚き、しばらくボーっと眺めていたのを覚えています。その後、平和記念資料館へ行き、写真や様々な展示物を見てショックを受けたものの、同じ日本で起きたことなのに、正直どこか他人事のような思いでしたが、子供が大きくなったら、一度は見せておきたいということも感じました。

そして、今回平和記念行事に参加させていただくことになりましたが、心から参加してよかったと感じております。それは、２日目に訪問した「本川小学校」で、ボランティアガイドさんのお話を聞けたことです。

事前に、「はだしのゲンのモデルになった学校」ということしか調べず、それ以上のことは詳しく調べませんでしたが、現地でボランティアガイドさんから、原爆が投下された８月６日は夏休み直前だったものの、３年生以上は集団疎開していたため、低学年の児童が多く登校していたこと、本川小学校で唯一の生存者となった居守清子さんは６年生だったが家族の意向で疎開していなかったために登校していたこと、原爆は地上に落ちて炸裂したのではなく空中で炸裂したこと、炸裂後の学校周辺や人々の生々しい状況等々を朝早い時間だったにもかかわらず、

気持ちを込めてお話ししてくださいまして、感極まって涙腺が緩みました。

初め、なぜここを見学コースにしたんだろうと疑問に思っていたのですが、今となっては、私個人としては、広島の原爆を知るために必ず行くべきところとして、原爆ドーム、平和記念資料館、本川小学校の３か所を挙げます。そして、平和記念資料館と本川小学校では、是非ボランティアガイドさん等のお話を聞いてほしいと思います。ただ展示物を見るよりも、お話を聞いた方が、感じ方が全く変わってきます。

小金井市には、この平和行事を毎年かかさず行っていただくことを望みます。

戦争を自分ごととして考える

保護者

戦争を経験していない私が、どのように戦争の残酷さを子どもに伝えていけばいいのか迷っていました。ニュースや本の知識だけでは、現実味が薄れて他人事に感じるのではないかと思っていた時に「平和行事参加の旅」を知り、参加しました。

初日に訪れた原爆ドーム周辺は、一度焼野原になったとは思えないほど整備され、国内外からのたくさんの観光客でにぎわっていました。

混雑した平和記念資料館の中に入ると、焼け残った生活用品や写真が展示され、思わず目を背けたくなるようなものもありました。作業場で亡くなった中学生の炭化したお弁当、自宅前で遊んでいた男の子の曲がった三輪車、皮膚がただれた写真、放射線の影響で苦しみ続けた方の言葉。被爆被害を歴史的事実として聞いていたのとは違い、そこにひとり一人の存在を意識すると、より残酷で、あまりの凄惨さに一緒に参加した子どもが、衝撃を受け過ぎていないか心配したほどでした。

また、被爆者のご家族からもお話を聞く機会がありました。その方は、家族伝承者として活動する目的について「平和を守るため」「原爆の被害を自分ごととして受け止めてもらいたい」からだと話されていました。今も世界のどこかでは戦争が続いているという現実がありますが、子ども達には戦争について、自分ごととして受け止めることが大切だと伝え続け、一緒に考えていきたいと思います。

最後に、原爆投下後、家族を亡くし住む場所も無い状況の中でも、広島の子ども達は学校に集まり、歌ったり笑ったりしていたと聞きました。どんな時でも希望を持った子供たちのたくましさに私も希望を感じ、改めてこれから私たちが平和を守る努力をしなければいけないと感じました。

「平和行事参加の旅」に参加して

中学３年生

夏前に両親から広島へ行くと聞いたときは、ただ「楽しみだな」と思っただけでした。実際に原爆ドームや広島平和記念資料館、本川小学校を見学して、私はそれまで「戦争はしてはいけない」という表面的な知識しか持っていなかったことに気付きました。

平和記念資料館で特に印象に残ったのは、「三人の中学生の遺品」です。帽子やベルト、衣服などが一人分のように見えましたが、実際には三人の中学生が身につけていたものを一つにまとめて展示してありました。生地は大きく破れてボロボロになっていて、熱風と熱線の激しい威力が伝わってきました。一つにまとめられるほど、遺品がほとんど残らなかったという事実にも、原爆の残酷さを感じました。

展示を見て回る中で「もし私がその場にいたら」と想像し、これが一瞬のうちに自分の体に襲い掛かってきたらと考えると、恐くなりました。そして私と同じくらいの年の子たちがこんなつらい状況下で、こんな残酷な亡くなり方をした事実に悲しくなりました。

広島で過ごした２日間は短い時間でしたが、戦争に対しての考えを深く見つめ直すきっかけになりました。また、知ることの大切さにも気付きました。戦争や原爆の悲惨さを知らなければ、同じ過ちを繰り返してしまうかもしれません。私には、平和を守っていく責任があるのだと思います。これからも、日々の生活の中で平和であることへの感謝を忘れずに生きていきたいです。

戦争のない平和・安心できる世界へ

小学４年生

私は、原ばくがどういう被害を与えたのか、一瞬で広島をどう変えてしまったのかをよく知りませんでした。広島に行ってお話を聞いたとき、放射線について初めて詳しく知りました。放射線は、目で見ることはできず、匂いもありません。知らないうちに体の中に入り込んで細胞をこわします。８月６日に気付かずに被ばくしたのが佐々木禎子さんです。

原ばくが落とされた時、貞子さんは２才でした。ケガもなく元気に育っていたのに、１２才になった時にだんだんと「体がだるい」と感じるようになって、大きな病気がある事がわかりました。貞子さんは明るい性格で、入院中も他の患者さんと仲良くなって明るさを持ち続けましたが、病気はどんどん悪くなっていきました。

貞子さんはある日、折りづるを千羽折れば願いが叶うと聞き、病気が治るようにと願い、千羽折りました。けれどその願いは叶わず１２才で亡くなってしまいました。

その時の折りづるが広島平和記念資料館にありました。折り紙ではなく、赤い薬の包み紙で折った小さな折りづるでした。

資料館から出て、ホテルの中で休んだ時、私はこう思いました。「今は、とっても幸せだな。平和だな。」でも、同時に安心はできませんでした。今も核兵器を持っている国が、９か国あると聞いたからです。いつ、どこで使われるかわからないと思うと、とてもこわくなりました。だからこそ、これから安心できる未来になるように、そんな未来につながるように、核兵器のない戦争のない世界を作っていきたいです。

広島訪問を通して感じたこと

保護者

これまで広島や長崎を訪れる機会がなく、戦争について深く考えることも正直少なかった私ですが、小学生だった子どもが「戦争、原爆、特攻隊」と戦争の出来事に興味を持ち始めたことがきっかけで、今年の平和行事企画の旅に応募しました。

戦後 80 年という節目を迎えているにもかかわらず、戦争を経験した祖父の話もほとんど覚えておらず、自分の子どもに伝えられるような具体的な話もできない自分に気づきました。親として、日本人として、このままではいけないという思いが、参加を決意した大きな理由です。

広島の平和記念公園に到着してすぐに感じたのは、空気の重さでした。静かで穏やかな場所なのに、空気の重さを感じ、原爆ドームを目の前にしたとき、写真や映像では、何度も見てきたはずなのに、実物の迫力と存在感に圧倒されました。崩れた建物が、静かに「ここで何が起きたのか」を語りかけてくるようでした。資料館では目を覆いたくなるような展示が多く、これまで教科書や映像、本などから得ていた知識では到底想像できなかった現実がありました。

多くの展示や本川小学校での語り部の方のお話を通して、実際にその場所に立ち、目で見て、耳で聞くことが、こんなにも心に響くものなのかと驚きました。教科書や映像、映画では伝わらない衝撃とショックが、広島には確かにありました。

今、ウクライナをはじめ世界では戦争が続いています。欲望の連鎖の結末が広島にはありました。

この旅を通して、私自身が学び感じたことは、過去の事実を一人ひとりが知ろうとすることが一番大事だと思いました。

私たちと生きた時代が違うだけなのに、なぜこんな目に遭わなくてはならなかったのか。凄惨すぎる現実に、平和教育の大切さを痛感しました。

帰宅後も平和の尊さと幸せを、そして自分が今存在することができている奇跡について、家族でたくさん話しました。

広島での体験は、私の中でずっと生き続けると思います。

「平和の鐘」出典：広島平和記念資料館ＨＰより

家族で訪れた広島で学んだ平和の尊さ

保護者

平和記念事業に、妻と娘と３人で参加しました。

参加のきっかけは、中学一年生の娘が戦争や平和について強い関心を持っていたことです。学校で学んだことをきっかけに「実際に現地に行ってみたい」と口にした娘の言葉に背中を押され、私自身も改めて戦争の悲惨さや平和の尊さを学び直す良い機会だと感じました。

まず原爆ドームを目の前にしたとき、写真や映像では何度も見ていたはずなのに、現物の迫力に言葉を失いました。崩れかけた鉄骨や焼け焦げた外壁は、今もなお 1945 年 8 月 6 日の惨状を物語っており、その場に立つだけで胸が締め付けられる思いがしました。娘もじっとドームを見上げ、そして、写真を何枚も撮っている姿が印象的でした。

平和記念公園では、慰霊碑や子どもの像を前に、多くの折り鶴が寄せられているのを見ました。一つひとつの折り鶴には祈りが込められており、人々が平和を願い続けてきた歴史の積み重ねを感じました。続いて訪れた平和記念資料館では、被爆当時の遺品や写真、被害の実態を伝える展示に胸が痛みました。焼け焦げた衣服や時計、持ち主の人生が突然奪われた事実を突きつけられ、改めて戦争の残酷さを思い知らされました。

本川小学校では、ボランティアの方から直接お話を伺うことができました。当時の子どもたちが体験した悲惨な状況や、戦後も続いた苦しみについて語られる姿に心を打たれました。娘も真剣な表情で耳を傾けていました。

今回の広島訪問を通して、私は改めて「戦争は人々の暮らしや命を一瞬で奪うものだ」という現実に向き合いました。そして、平和は当たり前にあるものではなく、世代を超えて大切に守り続けなければならないものだと痛感しました。娘

の学びの機会として訪れた旅でしたが、私自身も深く考えさせられる時間となりました。これからも家族で平和について語り合い、次の世代に伝えていきたいと思います。

このような貴重な体験をする機会を与えてくださり、ありがとうございました。

「原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）」出典：広島平和記念資料館ＨＰより

当たり前の日々に対して感じたこと

中学１年生

広島を訪れるのは初めてでした。今までに、戦争に関する書籍や映像、講演などを自分で調べることがあったため、原爆について知っていると思っていました。しかし、実際にその地に立つことで、より実感が湧き、一つの言葉では表すことができない力が原爆にはあったと考えるようになりました。

原爆ドームを目の前にしたとき、あまりの迫力に言葉が出ませんでした。崩れた鉄骨とむき出しの壁が、力強く人々の思いを伝えているように感じました。そして、戦争の象徴として保存されているこの建物は、過去の悲劇を風化させないため、戦争の体験者が時代とともに減っていく中で、後世にも伝えていくには、自分に何ができるかを考えるようになりました。

平和記念公園は、静かで美しい場所でした。その静けさの中に、深い悲しみと祈りが流れているようで、原爆の子の像の前に並ぶ千羽鶴は、亡くなった子どもたちへの祈りと、未来への希望の象徴であり、折り鶴一つひとつに込められた思いが、心に伝わってきました。

原爆資料館では、これまで見聞きしてきた情報では到底捉えることのできない現実がありました。焼け焦げた衣服、黒く変色した弁当箱、被爆者の手記。私が、中でも印象に残ったのは、被爆直後の街の様子を描いた絵と、亡くなった子どもたちの遺品です。数字ではなく「一人ひとりの命」がそこにあったということを考えさせられました。未来を信じてきた子どもや大人たちの展示を見ながら、涙が止まりませんでした。

本川小学校平和資料館では、原爆が落ちた当時の学校の様子や、児童たちの記録が展示されていました。自分よりも小さい年齢の子が、いつものように学校に送り出され、その「いってらっしゃい！」という言葉を最後に家族を亡くしてし

まったということを知りました。そして、当たり前の日々というものはなく、だからこそ毎日を大切にしたいと強く思いました。

広島での体験は、知識だけでは得られない「実感」を与えてくれました。戦争は過去の出来事ではなく、今も世界のどこかで続いている現実です。だからこそ、私たちは過去から学び、平和を守る責任があると思いました。この訪問を通して、戦争の悲惨さと平和の尊さを、自分たちが受け継ぐときに何を大切にするべきか考えたいです。

子どもと自分を重ねた広島の旅

保護者

この旅では数々の原爆の遺構を、丁寧に用意して頂いた資料を手に、一つ一つ見学させて頂くことができました。また、被爆体験の伝承のお話しは、八十年を語り継ぐ事の並大抵ではない市民の方々の日々の積み重なるご尽力を、お話と共に感じ入りました。

本川小学校平和資料館では「怖い、気味が悪い、という人間らしい感情さえ無くしてしまうのが戦争」と、現代の子どもへの語りかけをして下さいました。子どもらしさも、自由も、命までも奪われてしまった本川小学校の子ども達。この被爆の跡が残る校舎の地下で原子爆弾が炸裂したことを語る壁や窓枠に囲まれ、母になった私が小学生の子どもと手をつなぎ、八月の暑い朝にまさにその場所に居る。そんな、時間を越えて何かが重なり合うような、内的体験でした。

家族や家を失った子は、焼け残った本川小学校の校舎を見て「あそこに学校がある。あそこまで行けば助けてもらえる」と、方々から本川小を目指して集まったそうです。その目に映る光景は、どんなに凄惨なものだったか、想像も追いつきません。それなのに、「信じられないことに、校庭には子ども達の笑い声があった」そうです。その時、子どもは未来の塊だ、大人よりも、強いんだ！と、子ども時代の私が心の中で叫んだ気がしました。

過去の戦争を起こしたのは大人です。そして、平和教育には、大人の用意した正解はありません。なぜなら、未来には今の大人たちはもう誰もいないからです。十人十色、百人百通りの受け止め方、感じ方、行動があると思います。想像して、考え続けることが大切だよ、と、子どもに伝えていきたいです。

未来を作る子ども達に、この平和の旅の機会がたくさんありますよう、事業の豊かな継続を願います。この度はありがとうございました。

平和行事参加の旅

小学６年生

私はこの広島の旅で２回目の原爆ドームの見学でした。１回目とはちがって２回目の方が広島の原爆のことをくわしく知れていたのでじっくり見ることができました。

ほかにもいろいろな種数がある路面電車を乗ることができて東京では乗れない乗り物に乗ることができて楽しかったです。

集団生活では普段の家族旅行とはちがってはじめましての人がたくさんいたけれどすごく安心感があり旅がより楽しくなりました。

今回の旅でむずかしかったことは時間を守ることです。理由はたくさんの人との旅なので時間がおくれてしまうと他の人にもめいわくになってしまうといういつもとはちがうプレッシャーがあって思いどおりに行動するのがすごくむずかしかったです。それで私はそんな失敗をなくすために時間をうまく使えるようにがんばりました。

次に私は原爆がおちた場所ではないのに小学校の半分以上がくずれてなくなってしまっている本川小学校を見て一番、びっくりしました。

日本は世界ではじめて原子爆弾をおとされた国です。いまもいろいろな国で戦争をたくさんしている。私は日本だけではなく、他の国の人たちにもこの日本におとされた原爆のこわさを知ってほしいと思いました。世界中が原子爆弾やかくへいきはすごいこわくておそろしい物だからつかうのは絶対よくないし、みんなが平和でいてほしいと思っています。

私はこの二日間で一番心に残ったことは慰霊碑です。なぜならたくさんの千羽づるでみんなの平和の願いがすごくつたわってきたからです。

この旅、すべてをとおして戦争はぜったいしてはいけないし、かくへいきや原子爆弾のこわさを日本だけではなく、世界中に知ってもらい平和を保ってほしいです。

「爆心地・島病院（原爆被災説明板）」出典：広島平和記念資料館ＨＰより

小金井市「平和行事参加の旅」へ行って

保護者

広島へ到着し、初めに平和記念公園内にて碑を巡りました。敷地内には様々な碑が点在しており、その数は５０基近くにのぼります。資料を読みながら巡ると、広島の木材会社の本社が産業奨励館にあり、１００名余りが亡くなった事、日本人以外の人が原爆の犠牲になった人々のために占領軍総司令部へ救援要請を行ったり、米国でのケロイド治療に尽力していた事がわかりました。次に行った平和記念資料館では、爆心地から１．５㎞以内の自宅で被爆した山本さんのお話を聞きました。お父さんから「足がもげてもいいから。」と言われ、どうにかがれきの下から抜け出せた事、兵隊のトラックで避難所まで運んでもらえた事、父母が再会できた事など奇跡が重なって生き延びる事ができたけれど、お父さんが亡くなったのは自分のせいではないかと苦しみ、原爆症に苦しみ、私には想像しきれないほど辛かっただろうと思いました。資料館は、夏休みという事もあってかとても混雑していました。来館者には外国人の姿も多く、日本だけでは平和な世界は作れないので、関心を持ってもらえる事を嬉しく思うと共に、日本内外への発信の大切さを感じました。

翌日の本川小学校では、『いわたくんちのおばあちゃん』の作者である天野さんのお話を聞くことができました。本川小学校唯一の生存者である清子さん、本当は清子さんと一緒に登校していた青原さんも助かった事、熱線による火災から逃れるために夕方まで川の中にいた事、元気そうだった青原さんが原爆症で亡くなった事、清子さんも原爆症で苦しんだ事、外傷がないために原爆症の辛さを理解してもらえなかった事などを教えていただきました。

今回の旅では、原爆により、その雲の下で何か起こっていたのかを知った一方で、なぜ広島が狙われたのか、被爆者は日本人だけだったのか、日本は何をした

のかなどの疑問がわきました。私が幼い頃、戦時中を生きた祖母は、目の前に焼夷弾が落ちてきた事、アメリカ兵を竹やりで刺すのを見た事などを話してくれました。それがあったから、私は戦争について知りたい、子どもに知ってもらいたいと思うようになったのだと感じています。祖母から「一番下の弟は戦争に行って、フィリピンで死んでしまった。いつかフィリピンの海に花を流して欲しい。」と言われ、足跡をたどりましたが、カンギポット山に行った事までしかわかりませんでした。亡くなったとされる日は、終戦の１か月ほど前でした。祖母の弟は志願して陸軍へ行ったそうです。国のために死ぬのが一番立派な事だと教えられていた時代に、戦争は国民を兵隊にし、生活も一変させてしまいました。原爆投下に至る背景にあった日本の侵略という歴史、加害の側面を含めて、これからも子どもたちと一緒に学び続けたいと感じる旅でした。

「広島県地方木材統制株式会社慰霊碑」出典：広島平和記念資料館ＨＰより

「平和行事参加の旅」感想文

小学４年生

ぼくは、広島に着いて碑めぐりをしました。原爆ドーム、広島県地方木材統制株式会社慰霊碑、原民喜詩碑、動員学徒慰霊碑、元安橋、広島市平和記念公園レストハウス、被爆したアオギリ、広島平和記念資料館、マルセル・ジュノー博士記念碑、平和大橋、ノーマン・カズンズ氏記念碑、平和の塔、広島県農業会原爆物故者慰霊碑を周って、原爆のことを知りました。例えば、マルセル・ジュノー博士は広島に医薬品を持ってきてくれたこと、動員学徒とは、第二次世界大戦中、労働力不足を補うために中学生以上の生徒が軍事工場等で労働力として強制的に働かされていたこと、原爆ドームは一しゅんにして大はし天井から火を吹いて全焼、中にいた３０人余りの人々が亡くなったと伝えられていることです。

もし今、このようなことがあったらこわいから、戦争も原爆もしてはいけないと思いました。

「マルセル・ジュノー博士記念碑」

出典：広島平和記念資料館ＨＰより

「動員学徒慰霊塔」

出典：広島平和記念資料館ＨＰより

広しまのたび

小学２年生

わたしは、へいわぎょうじさんかのたびで広しまに行きました。

一日目は、広しま平わきねんしりょうかんに行って、家ぞくでんしょうしゃの話を聞きました。家ぞくでんしょうしゃのおかあさんは、げんばくがおとされたところから１．５㎞い内のところでげんばくにあって、家がくずれて足が下じきになったけど、足がもげてもいいから、と言われて、がんばってひっぱるとぬけてにげることができました。その話を聞いて、もし足が切れてしまったら、あるけなくなってしまうなと思ってこわかったです。次にしりょうかんのてんじを見に行きました。ゆかに大きな丸いスクリーンがあって、そこにひこうきがげんばくをおとすよう子や家やたてものがくずれるよう子がうつって、ばくはつのよう子がこわかったです。

二日目は本川小学校でげんばくがおとされて火じになったときのけむりのあとがあってこわかったです。あとまどガラスがわれてグチャグチャになったけれど、みんなあつまってべんきょうしていたと聞いて、すごいなと思いました。

こんなにこわいげんばくはぜったいにおとしてはいけないと思いました。